

《共同監督コメント》

いわきノートの取材を通じていわき市で何人もの方と出会いました。その中の仮設住宅で暮らす西原さんとは今も交流が続いていて、私のことを自分の娘のようだと喜んでくれます。そのような交流によって、私は震災や原発事故を他人に降りかかった出来事ではなく、自分に関係することとして受け止めることができるようになりました。この映画を見たみなさんにも、自分との関係性を少しでも考えていただけたら嬉しいです。／佐々木 楓
(芸術専門学群 4年)

取材をおこなったのは2年半前のことになりましたが、私はそれまで福島の実態をほとんど知りませんでした。取材で知り合った霜村さんや石井さんが発信する SNS を見るようになってから、マスコミで報道される表層的な事実だけ受け取っていたときは異なって、被災地で暮らす人びとの心情を想像するようになりました。この4月からは大学を離れ社会人になります。新しい生活が始まってからも、被災地に暮らす人たちのことを考え続けていきたいと思います。／鈴木ゆり(芸術専門学群 4年)

私はこの映画製作に参加したことで、私自身の生活の視点が変わりました。
マスメディアは震災の風化やエネルギー問題について報道していますが、それよりも被災地から人が離れたこと・本当はその地にいたかった人がいること、それでも笑顔でいようとする人がいることに、眼がいくようになりました。
生きていく中で、日々事件が起きて、困難なこともあります。その中で生きているエネルギーをもっと見つめていきたいと思っています。岡崎 雅 (人間学群)

《ドイツ語翻訳者コメント》

(3人ともボン大学日本学専攻)

初めて映画を見た際、いわきの被災者の方々の震災二年後の生活が、困難や悲しみを抱えつつも悲しみに生きる

のでなく、震災を新しいスタートとして見つめ、人と人との新しいつながりを生むものになっている点に感動させられました。被災地及びその周辺に暮らす人々の生活について、直接に考えを寄せる機会がドイツ語を話す方々にも与えられたら、と思い、この悲しみと共にありながらも前進へと向かう意志の強さに溢れた「いわきノート」の独語訳に参加させていただきました。／桑山裕喜子

私が「いわきノート」のドイツ語翻訳をしたと思った理由は数多くありますが、その中で2つの大きな理由があります。一つ目は、このプロジェクトが正式な翻訳依頼で、貴重な経験を得られる機会であり、一時間半という長編映画の翻訳にチャレンジしたいと思ったからです。多くのドイツ人は、日本人は震災後の未来に不安を抱いていると考えています。しかし、この映画を見ると、いわき市の方々が夢や希望を持ち、前に進み続けていることが分かります。また、様々な職業や年齢層の方の幅広い意見が聞けるストーリーなので、ドイツで全く知られていない、東日本大震災で被害にあった人々の暮らしや考え方が分かる内容となっています。だからこそ、この映画を翻訳し、ドイツの人々に見てもらいたいと思いました。／Caroline Block (カロリネ・ブロック)

なぜ「いわきノート」のドイツ語字幕を作ろうと思ったのかといいますと、やはり筑波大学の11人の学生チームが作った作品に深く感動したからです。東日本大震災が起こり、その後の、いわきの市民の日常、悩み、喜びをこんないきいきとした形で捉えてくれて、今も映画に出ている人の話や、その表情の細部まで生々しく記憶に残っています。「英語よりドイツ語」にしたのは、英語をよく分からない人も何人かいるのではないかと思い「言葉のバリアフリー」、「ユニバーサルデザイン」という概念から考え、ドイツ語圏で「いわきノート」を観ることができる人の数が増えることを希望し、ドイツ語字幕があればいいな、と思いました。／Alexander Tokarev (アレクサンダー・トカレフ)